

全科協 ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成18年1月1日発行（通巻第206号）

特集：戦略的な集客 水族館のあらたな運営と集客戦略

新江ノ島水族館 館長 堀 由紀子



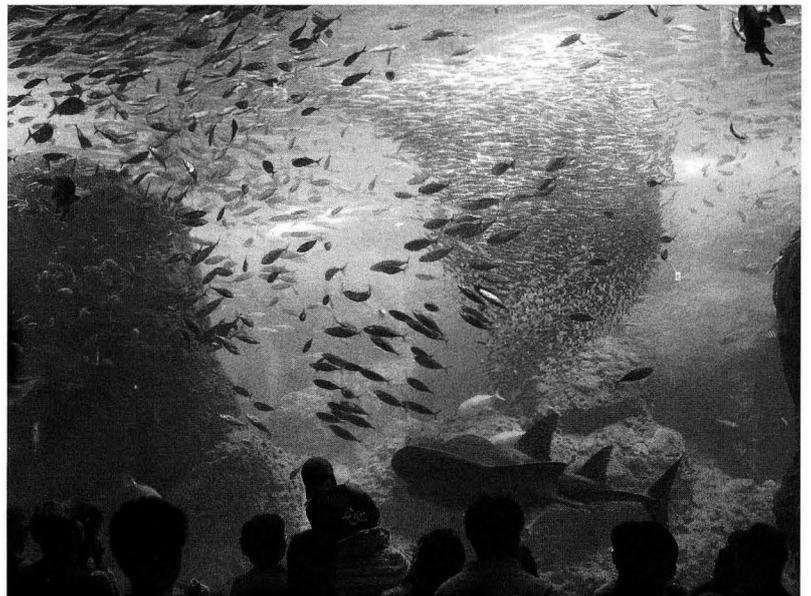
新江ノ島水族館 エントランス
延べ床面積 12,000㎡
展示生物 500種25,000点

日本は世界でも有数な水族館王国であり、その数は(社)日本動物園水族館協会に所属する水族館で70園館、類似施設を含めると何と130数館が全国に点在しており3,000万人以上の集客があるといわれます。新しい水族館に共通することは、都市型、地域型とある中で一つの観光拠点として観光立国日本の施策に貢献致しております。

今何故水族館かと言われるほど建設計画は着実に増加傾向にあります。自然との共生と環境保全が大きなテーマとなっている今日、水辺や海辺の生き物たちは様々な話題としてテレビや新聞に登場しその不思議な生態や知られざる環境が紹介されると、まるで未知なる世界が開かれる様に驚きや発見が生まれ、このことが水族館への期待を押し上げております。

神奈川県に所在する新江ノ島水族館はP.F.I.事業(民間活力推進事業)として海洋総合

文化施設に位置づけられ、時代のニーズに適した望ましい姿を実現しようと産・官・学、連携の構築を模索致しました。江ノ島水族館50周年事業として、平成16年4月16日、新装オープン致し、初年度入館者は184万人となりました。



相模湾大水槽

～官から民への時代～

P.F.I.事業は多様な手法がありますが、新江ノ島水族館はB.O.O. (Build Own Operate: 建設・所有・運営) の独立採算型方式で、神奈川県に所有する水族館の一角である「なぎさの体験学習館」はB.T.O. (Build Transfer Operate: 建設後神奈川県に譲渡・維持管理運営) 方式で維持運営を行う、という2方式で行われました。事業期間は30年間の県との契約を平成14年に行いました。特別目的会社「江の島ピーエフアイ(株)」を設立し、かなり民意が反映された自由度の高いシステムとなりました。

当館の沿革を紐解きますと、江ノ島水族館(旧称)は藤沢市片瀬海岸に所在、昭和29年7月開館、堀久作(元日活社長)の個人事業としてスタート致しました。これは国内外でも珍しいケースでもあります。初代館長の雨宮育作(東大名誉教授)は、日本の動物学の祖であるE・S・モースの直系の弟子であり、モースにより日本の海洋生物学発祥の地とされた江ノ島にふさわしい科学的・教育的施設として、先駆的にご指導いただきました。約30年が経過し神奈川県では「豊かなみどり」と美しいなぎさの保全」を基本理念とする「湘南なぎさプラン」を昭和60年より策定。新しい海岸文化の創造が検討され、湘南海岸公園内にある当館も再生計画として新水族館構想をスタートさせました。そこで当館では、湘南から広がる相模湾をベースに、未来を握る鍵として「生命」や「自然」に対する科学的興味を「命」という身近なテーマで表現し、大人から子供まで楽しめるエデュテイメント性(エンターテイメントとエデュケーション)豊かな水族館と致しました。展示ストーリーは相模湾と太平洋がテーマであり、「出会いの海」の波しぶきや千トン水槽における8,000匹のマイワシの群行動、干潟やアラメ・カジメの藻場、生物のゆりかごとと言われる海草や流れ藻、きらめくサンゴ礁は地球温暖化を食い止めCO₂の吸収が甚大であることなど、様々な環境展示を展開。又、今回初めて深海の生物飼育に取り組み、独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)と共同の実験所を設置。未知で未開の深海の極限生物たちの長期飼育にも挑戦しております。高圧・暗闇の世界を紹介すべく、特殊加圧水槽を設置し、特殊照明を工夫し、映像利用を含め研究開発の実践の場として活用しております。ショースタジアムでは、イルカと女性ダンサーのミュージカルを公開。湘南の海を学び、人と動物のコラボレーションが満喫できればと考案し好評

を得ております。なぎさの体験学習館では、なぎさをテーマに砂のバリエーションの展示や波の実験装置や飛砂体験をハンズ・オン方式(五感を通して理解する)で行っております。砂浜のゴミが美的に体系化され、アート風になるビーチコーミングの活動もユニークです。

展示のコンセプトは、「フィールドミュージアム」、「生物の多様性への挑戦」、「地域性と国際性」、「環境教育生涯学習の場」、「本格的なエデュテイメント型水族館」と致しております。

～魅力度を増す集客戦略～

リピート性を重視する対策に当館では「年間パスポート」を実施致しました。入館料(大人2,000円、子供1,000円)を、おのおの二倍の額で、地域の方々にいつでも何度でも使える「私たちの水族館」という意識の高揚を定着したいと考えました。その結果、新江ノ島水族館は15万人の会員を確保致しております。

支援組織「サポーターシステム」を設立。環境保全に役立てる様に、法人には一口30万円(3年間)と、個人大人12,000円、小学生7,000円(1年間)と定め、サポーターコーナーは特色あるネームプレートを壁面に公開し、感謝の意を表しており順調に拡大しております。

・イベント、催事

オープニング時は、混雑を予想し特別展は比較的に流動し易い写真展や映像利用を行い、アニマルプラネットと共催で、各種動物映像と共にクイズラリー、おもしろ体験イベントを開催。2005年10月に深海の世界の特別展では、「しんかい6500」の潜水艇を水族館広場に展示、世界最大の地球深部探査船「ちきゅう」の紹介とその取組みについて、独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)の方々と共に解説。もっとやさしく理解する為にディズニーランドの教育キャラクター「ネポスとナポス」に登場して頂き、「地球を遊ぼう」のプログラムで一ヶ月15万人の入場となりました。お泊りナイトツアーも週2～3回行われ、40人を限定しておりますが女性だけのツアーを開きましたところ10倍の人の応募があり、女性客にも口こみで広がっております。マリンスタージアムでは、イルカの握手体験を一日数回行い、特にシーウォーカー(簡易潜水器)での潜水体験によるイルカとのふれあいは驚きに満ちた体験プログラム

で好評を得ています。夜の水族館として、新たにパーティー業務の拡大を行い、結婚式や企業の宴会、大学のOB会では1,500名の集会もあり、新たな事業機会を得ております。

・宣伝、広報

年間を通した通常のポスター掲載等だけで極力宣伝広告費を押さえ、県・市の観光協会と首都圏の観光キャンペーンを実施。水槽展示やキャラクターの着ぐるみを披露して、チラシ配布を行っております。広報は年間800件のマスコミ等に対する掲載となり、TV、諸雑誌の対応で多様な営業活動を展開致し集客拡大の企画を全社的にを行い、飼育技術者も参画しております。

・体験学習プログラム

体験学習施設はフィールドに積極的に出て臨海、林間のふれあいの少なくなった子供たちや老人に至るまで、水辺体験、乗船体験そして館内の飼育のバックヤードツアー等での飼育下の種の保存の取り組みを参加型のプログラムとして数多く実施致しております。地域から県域をまたいだ幅広い支持層を得ているのがアンケート調査でも立証されました。博物館の望ましい姿である市民参加型のプログラムやボランティア活動の実施が不可欠である事を実感しております。

産・官・学・民と四位一体となった連携の環境保全を主眼としておりますが観光と環境の共生、経済性と生態系の両立であるエコミュージアムとしてこれからも集客拡大の可能性は十分あるのではないかと思います。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館における集客について

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 企画課 村山 哲

ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下「当館」という）は、平成6年11月13日にオープン以来、公共交通機関のアクセスが極めて悪いという条件にもかかわらず、毎

年40万人を超える来館者を確保し、平成17年4月24日には開館以来の累計来館者が500万人を突破した（平成16年度までの入館者推移について図1参照）。

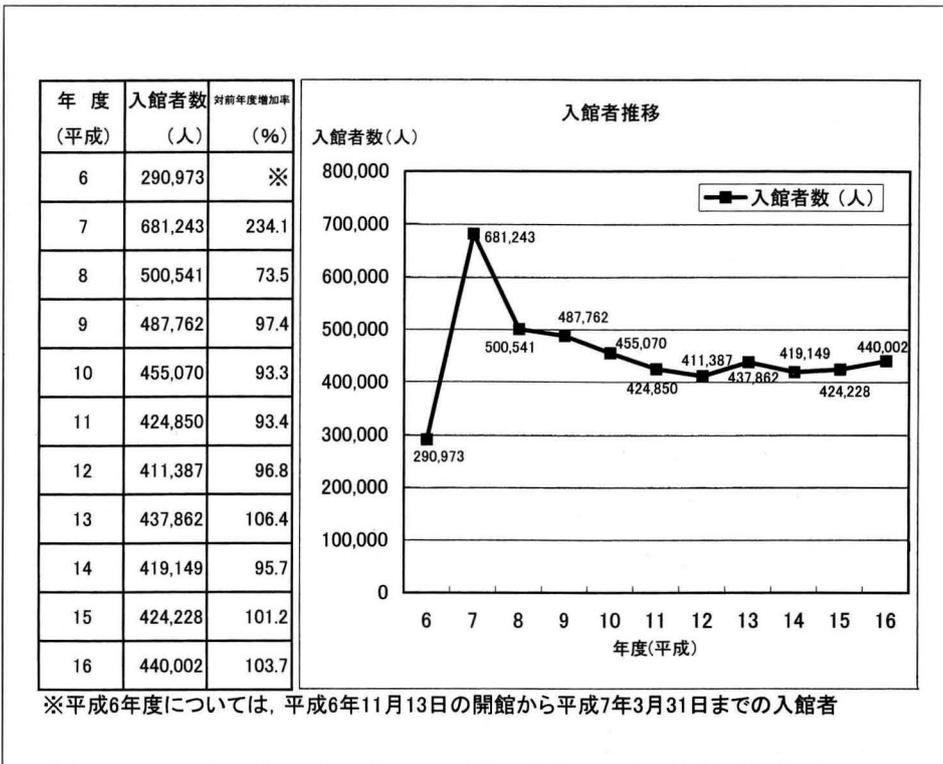


図1 入館者数の推移

当館は、昨年10周年を迎えたことを期に、更なる10年を見据えた「茨城県自然博物館進化基本計画」を策定し、今年度より計画に沿って事業をスタートさせた。

公立の博物館が、独自で長期計画を策定している例はまだ少ないと思われるが、この「進化基本計画」は、日本博物館協会が提唱する「博物館の望ましい姿－対話と連携の博物館－」を実践するものとして、開館時からの使命と目標を見直し、これからの当館の在り方を明文化したものである。この「進化基本計画」では、当館の使命を「人

と自然の調和ある共存を推進し、潤いのある文化生活の向上を図る」とし、その使命を遂行するための活動目標として「自然と共生し、市民と協働する博物館」を掲げている。これは、茨城の風土に根ざした自然科学の探究を推し進めることで、人と自然の調和ある共存を考え、効果的な活動を行う（＝共生）とともに、楽しく学ぶミュージアムパークとして機能しながら、博物館活動と成果を広く市民（県民）と共有しての知的楽しみの創生、発展を図る（＝協働）博物館を目指すものとしている。県民の信託財産である自然資料を後世に残していく施設であることはもちろんのこと、その資料について多くの県民と情報を共有し、その情報を利用できる場所であるために、楽しく利用できる施設として当館に多くの方々が集まることが重要であり、これまでの集客を基礎にさらなる集客を見込んでいる。そして、具体的計画では、当館での常設展や企画展などの展示、学校利用や展示解説などの教育普及、広報といった各分野において、全てが「共生と協働」という目標のもとに、来館者アンケートや博物館モニター制度を通じて集約される来館者の動向及び要求、博物館協議会や各種助言者会議といった専門家による意見などを反映し、より実効性のあるように検討を重ねている。以下、「進化基本計画」の実施をベースに事業毎の集客に関する取り組みについて考察する。

1. 展示事業

博物館の本来の目的は、資料の収集保管、調査研究と展示にあるが、集客ということで直結するのは展示ということになる。

展示については、入館者の立場に立ち、子どもからお年寄りまでが見やすくわかりやすいように、ハンズオン（触れる）といった体験型要素を多く含んでいる。さらに、常にどこかが新しいという新鮮な印象を与えられるように、展示替えや新しい知見に基づく解説の更新は、定期的に実施している。

また、年3回実施している企画展についても、集客をはかる大きな要素となっている。常設展では伝えきれない最新の情報をさまざまな角度から紹介することで、当館来館者の期待も高く、多くのリピーターを確保する原動力ともなっている。企画展の中には、高度な専門性を有する展示以外にも、子どもたちが遊びながら親しめるようなコーナーを設けるなど幅広い年齢層に対応できる展示を構成して



写真1 第35回企画展のプレイコーナー

いる（平成17年10月15日～平成18年1月9日開催の第35回企画展：写真1参照）。

また、企画展を実施していない2月を利用し、広く一般から自然に関する資料を公募し展示紹介する特別展の市民コレクション展も、一般の方が博物館展示に参加する数少ない機会として、集客に貢献している。

2. 教育普及事業

当館の利用については、学校等の遠足や校外学習といった団体の割合が多い。そこで、団体利用を促進するため、団体利用の手引き及び学校向け利用案内、野外利用案内チラシを作成し、県内及び近隣4都県の教育事務所等に館スタッフが出向き、各学校への配布を依頼している。それと同時に、学校配布地域と同じエリアの旅行代理店にも同内容の資料を配布し、旅行会社が学校に遠足プランを提案するための資料に活用してもらっている。そして、学校団体での利用の際には、児童・生徒が自主的、能動的に学習できるように、自然発見ノートをはじめとする学校向けの当館見学・観察プログラムがあることも、学校利用による集客につながっていると考える（学校向け案内、プログラム等資料：写真2参照）。

一般の方の利用については、館内での展示解説員（ミュージアムコンパニオン）の展示ガイドツアーや展示の音声ガイダンスにより、展示と連動して来館者に新たな発見を与え、野外では学芸員のガイドツアーや自然体験をサポートするプログラムなどがあり、はじめてでもリピーターであっても博物館や自然を楽しむことができ、結果としてリピーター確保という集客に繋がっている。



写真2 学校向け案内資料（上2種）と
学校利用プログラム（下2種）

そのほか、生涯学習時代として高齢者の利用増加に伴い、高齢者が子どもと違った視点から展示を楽しめるような学習支援プログラム、幼児連れ家族の利用が多い状況に対応できるファミリープログラムなどの各種プログラムを開発している。これらは、ガイドツアーとともに博物館を楽しく利用するためのアイテムとして、今後の集客にさらなる大きなプラス要因となることから早期実施に向け準備を進めている。

3. 広報事業

集客の最大の要因である広報については、当館の場合多岐に及んでおり、平成16年7月1日発行の全科協ニュースVol.34. No.4の特集「博物館の広報活動」のなかで当館におけるリサーチに基づく広報戦略について詳細を報告しているので、ここで多くを論じるより当該報告を参照願いたい。

当館では、集客のためにイベントや広報を企画する独立セクション（企画課）があるが、イベント、広報ともできる限り安価で効果的な方法を常に検討し、実施している。広報で効果の大きなものとしては、博物館に向かう主要幹線道路の横断幕、県内外の近隣地域の小中学生への企画展や各種イベントのチラシ配布、そして、当館事業を来館者としての視点で評価してもらおう博物館モニター制度などがあげられる。

特に来館者としての立場で当館運営に意見を提出するモニターは、当館のスポークスマンとしても機能しており、集客に大いに貢献してくれている。

<まとめ> -Hospitality: もてなしの心-

以上論じてきたとおり、当館における集客は、各種事業を通じて博物館全体で支えているが、それらは全て館職員のみならず友の会やボランティア、ショップ、レストラン、さらには警備員や清掃員など館に働くスタッフ一人一人が常に来館者に対する「もてなしの心」（Hospitality）をもってそれぞれの業務にあたることを前提としている。

来館者アンケートで「当館の存在を何で知ったか？」を尋ねる設問の回答では、「他人から聞いて」という、いわゆる口コミの割合がもっとも多い。来館者が楽しく過ごしたことを周囲に伝え広めることが、後々大きな集客に繋がることを考えれば、各事業への取り組みの際に、常に心に留めておく必要があるのではないかと考える。



野外ガイドツアー「野鳥をみよう」の様子

博物館と人をつなぐ「はくぶつかんだより」

鳳来寺山自然科学博物館 学芸員 加藤 貞亨

1. 手書きの「はくぶつかんだより」

創刊は昭和63(1988)年4月である。担当をまかされた友の会の会員に、博物館のニュースを伝えることを目的に始めたものである。

B4用紙に手書きで、自由に書き込み、紙面の構成は特に決めず、レイアウトも毎回異なっている。したがって、発行当初とはずいぶん変化してきているが、時々話題を、紙面にばらまくようなスタイルは現在も継続している。

年間に5~6枚のペースで発行し、10年で50号、17年目でようやく100号にたどりついた。開始した当時は会員も90人ほどで、窓口での配布分もあわせて150枚も刷れば十分であった。

その後、会員数も順調に伸び、平成17年度には900人を超すまでになった。会員の増加にともない、発行部数も増えることになったが、上司から博物館の活動を町民のみなさんにも知ってもらえるよう、「はくぶつかんだより」を町内に回覧したらどうかとのアドバイスがあり、平成8(1996)年10月から回覧を始めた。

回覧をしたところ、ある地区では、地区内全世帯に行き渡るようにコピーをして配布してくれたり、議員から町内全戸に配布するように要望がされるようになった。そして翌年の春からは町内全世帯に配布することになった。

これまで、友の会員と来館者にのみ配布していた「はく



はくぶつかんだより 第1号

ぶつかんだより」であったが、これ以降は鳳来町の約4200世帯の全戸に配布されるようになった。

このことよって読者も格段に増え、また、それまでは博物館に縁遠かった人たちも、たよりの話題で声を掛けてくれたり、地元のさまざまな自然情報や、資料の持ち込み、質問が寄せられるようになった。

博物館を身近に感じてもらえるようになったことで、気軽に館に足をはこんでくれるようになったようである。また、博物館に足を運べないようなお年寄りも「はくぶつかんだより」を楽しみに待っていてくれるとの話を耳にするようになった。

2. 博物館と人をつなぐ手紙

今は、美しく整った文字や、洗練された絵や写真があふれている時代である。そうした中で、多少読みづらくへたくそでも、ペン先の震えや息遣いが伝わるような素人の手書きのたよりは、パソコンの普及した現在では、むしろ希少な情報伝達手段ではなからうかと思ひ、執筆当初のスタイルを変えずに描き続けている。博物館の日常や、地元の自然の話題、館をとりまく人々の表情や活動が目に浮かぶような執筆を心かけている。



全戸配布になってからは、友の会員だけでなく町民や、これまで博物館に無関心だったり、もしかしたら批判的な人もいるかもしれないことを意識して、ひとりひとりに手紙をかくような気持ちで執筆している。

市民や利用者がこのたよりをとおして博物館活動の一端を垣間見て、理解者となり、ひいては応援団になってくれることを願っている。

鳳来寺山自然科学博物館は昭和38年4月に、国指定名勝天然記念物「鳳来寺山」の麓に建設された。今年で開館から43年目になる。「愛・地球博」が開催された愛知県の東端、奥三河の山間にあり、平成17年9月までは鳳来町立の博物館であったが、合併により人口5万5千人の市立博物館となった。しかし、地域が広がったのみで、財政の乏しい山あいの市であることに変わりはない。

行財政改革が叫ばれ、費用対効果の観点から入館者数、収入をもとに博物館活動の評価をする風潮が以前にもまして、顕著になってきたように思われる。効果の部分を入館

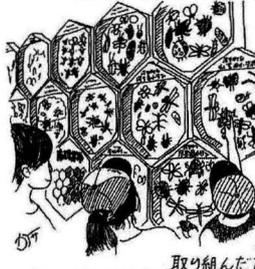
者数や収入だけで評価、判断しようとするのは、博物館の使命や目的にそぐわないと思うが、利用者の拡大は切実な課題である。たよりを読んで、ひとりでも興味を持って、足を運んでくれたらと思う。

厳しい財政事情の中で、新しい市域の全世帯に「はくぶつかんだより」を配ることは、これまでのようにはたぶんできなくなる。今日まで培ってきた町民とのパイプをさらに広いエリアとなった市民に広げ、絆を結ぶには、これまで以上の労力や時間が必要だろう。

当館では、1999年からホームページを立ち上げ、情報発信を行っているが、当地方に住む多くの市民にとってインターネットは、まだまだ、どこか別の世界のツールであって、あまり普及しているとはいえない。

当館のような超アナログな手法は、まだ、館と人を結びつける一つの方法たり得ると思って、読者がたよりを待っていてくれるかぎりは、続けようと考えている。

夏休みと博物館



愛知万博瀬戸会場
(平成17年8月3日)

万博の瀬戸会場に行ってきました。愛知県、パビリオンの森の回廊には、県内の小中学生が製作した、リサイクル品による動物たちが、六角形のケースに設置され、壁一面に展示されていました。

南設楽館のコーナーには、鳳来町全校の作品がみごとに展示してありました。昨年、いっしょけんめい取り組んだ成果ですネ(Na. 94参照)。

子ども自然講座「縮み草あそび」
(平成17年8月27日、7名参加)



山田由乃先生の講師でおこなわれました。午前中は植物観察と草み草。午後は採集した草花で、草木ぞめの実験やシジュース、寒天ゼリーを作って試食もしました。たのしくて、おもしろい講座でした。

「魚のしらべ方」講座
(平成17年8月6日、6名参加)

「先生のための自然と博物館利用講座」の動物分野。今回は魚がテーマでした。堀正和先生が講師となり、吾妻川の魚を実際に採集しました。採集した魚は水槽で観察。標本はスケッチをして、それぞれ魚の特徴をしっかりと観察しました。

はくぶつかんだより 16,104 2005.8



「鳳来寺参道沿いの植物」講座
(平成17年8月23日、17名参加)

「先生のための自然と博物館利用講座」の植物編。三津井宏先生が講師で、町内外の学校の教師が参加してくれました。参道沿いによく目にとまる植物を中心に、観察や指図の方法などについて、実践的な講座でした。また、三津井先生が得意の竹笛を披露され、関心が集っていました。

子ども自然講座「石器づくりと原石さがし」
(平成17年8月20日、30名参加、講師・館長)



門谷の高徳の沢に入って、石器に適した石(松脂岩)をさがしました。でも実際に割ってみると、なかなかうまくいきません。次にあらかじめ採ってあった朝山の松脂岩を使おうと、うすくきれいに割れ、さらにフキで細かく割るととて美味く、くんとよくなりました。野菜で実験するときにはえがまぐわがりました。

夏休みの人気者たち



中学生の職場体験 (鳳来中学校2年生)

8月4日～10日まで、中学生が博物館の職場体験にやってきました。2班に分かれて、3日間プツでした。販売標本用の岩石割り、館内外の清掃、野外観察会の同行など、博物館の仕事のほんの一部ですが、体験してもらいました。長迫、荻野、岡、橋本、長谷川、生田、高柳くんら7人は、館で何を感して帰ってこられたでしょう。

友の会サミット2005 (平成17年8月13・14日)

大阪市自然史博物館で「自然を楽しむ博物館づくり自然史博物館友の会サミット2005」がありました。当館友の会役員の小原、竹内、深見と4人と学芸員で参加しました。関西各地の友の会のアス展示や、活動自慢、ミュージアムショップミーティング、友の会と博物館の関係、会報、友の会の可能性に関する分科会に出席。たくさんの情報と刺激をいただくことができました。懇親会では、小原会長が鳳来寺山自然科学博物館と友の会について、おおいにアピールし、拍手がわっていました。



教員の博物館研修

黄柳野小学校の松山教諭(3日間)と鳳来寺高校の鈴木教諭(2日間)が、職場研修で博物館の仕事を経験しました。まずは毎朝、職員全員で行なっている館内そうじです。次に展示解説作り、保護動物のせめ、講座の助手などです。今後、博物館を活用してどうするために、理解を深めてもらえればうれしいです。

韓国・大邱市に、科学館建設へ

このほど明らかになったところによると、韓国・大邱市に新しく公立科学館が建設されることになった。同館の整備事業に対して、米国のアンタアナ(カリフォルニア州)のディスカバリー科学館が全面的に技術供与することになっており、同館と大邱市との間にその契約の調印式が2005年11月7日にサンタアナで行われた。建物だけでなく、館の活動もほぼディスカバリー科学館に似たものが計画されている。韓国で国立科学博物館をはじめ、サムスン子ども博物館、浦項科学館などの博物館やロッセワールドのマルチメディアの展示を手がけたトロントのヴィヴィッド・グループが手がけることになっている。開館時期：2007年予定。

Daegu Science Center.

Vivid Group, Toronto.

Discovery Science Center, Santa Ana.

<http://www.discoverycube.org/>

米サンフランシスコに、「緑の博物館」が建設中

カリフォルニア科学アカデミーに、現在熱帯雨林をテーマにした博物館が建設されている。地元では「緑の博物館 Green Museum」と呼ばれ、2008年の暮れの完成のあかつきには、アマゾンの熱帯雨林が再現され、1万匹の動物の飼育展示が見られることになっている。総工費3億9200万ドルの建物の屋上の全面を使って、アマゾンの熱帯雨林で見られる植物が約170万点栽培されることになっている。また新しい施設の目玉は、高さ約30メートルの熱帯雨林ドームであり、アマゾンの熱帯雨林が再現される。建物の設計はレンゾ・ピアノ。

Green Museum, California Academy of Science.

http://www.calacademy.org/geninfo/newsroom/releases/2005/Green_building_facts.html

カナダ自然博物館で、大々的なリニューアルが進行中

オタワのカナダ自然博物館では、2009年の完成をめざして、現在の建物の大々的なリニューアルを進めている。工事は既に2004年5月から始められ、2006年10月にはカナダの鳥類ギャラリーと哺乳類ギャラリーがリニューアルされるほか、化石ギャラリーが新しくオープンする。整備工事が完了する2009年には、鉱物ギャラリーがリニューアルされ、人類をテーマにしたギャラリーと、水をテーマにした

ギャラリーが新たにオープンする。また触察学習を重視したディスカバリー・センターも2009年にオープンする計画だ。建物の設計は、クワバラ・ペイン・マッケンナ・ブルームバーグ(トロント)が手がけている。

Canadian Museum of Nature.

http://www.nature.ca/reno/index_f.cfm

英エデン・プロジェクトに、教育センターが2005年9月にオープン

イギリス南西部のコーンウォール地方に2000年に開館した巨大な植物園「エデン・プロジェクト」に、2年の歳月と総工費1500万ポンドをかけて、新しい教育センター「ザ・コア The Core」が2005年9月19日にオープンした。三層によって構成された新しいセンターでは、1階に展示施設を、2階には学校向けの教育プログラムを、そして3階にはカフェが設けられている。1階の展示施設では、特別展が開催されるギャラリーと常設展示ギャラリーがある。常設展示では、生物多様性をはじめ、気候の変化、水と生命などが主要なテーマになっている。また2階で教育プログラムが行われる四つの部屋は、それぞれテーマ内容に従って「種子」「鞘」「発見」「探検」の名がついている。

The Core, Eden Project.

<http://www.edenproject.com/>

カナダ科学技術博物館で、映像記録の保存の歴史をテーマにした企画展が開催中

オタワのカナダ科学技術博物館では、現在映像記録の保存がどのように行われてきたかを紹介した企画展「Fading Away: Saving Your Electronic Memories」が2005年9月25日より開催されている。この展示で、観覧者は映像記録のさまざまな保存方法が開発されてきたことを知ることができ、現在の最先端の保存技術に至るまでの技術の進化を辿ることができる。展示品の多くは、同館に保存されている膨大な数の収蔵品から選ばれたものであるが、中でも目玉展示になっているのは、音声情報を鋼鉄製のテープに保存するブラットナーフォン(Blattnerphone)だ。これは、現在一般家庭に見られるテープ・デッキに相当するシロモノだが、第二次世界大戦中イギリスからの短波放送を記録するのに使われていた。しかし戦争が終わるまで、1台しかカナダになかったこのデッキの再生

機能が故障していたため、意外なことに長いこと録音された放送内容がどんなものだったかを多くの人々の間で知ることがなかった。1992年になってようやくオーストラリアで保存されているブラットナーフォンを使って、鋼鉄製のテープの再生に成功し、さらにデジタル方式で再ロックオン(ダビング)が行われ、そのディスクがオタワのカナダ科学技術博物館での企画展で聞けるようになっていた。会期は2006年2月29日まで。

Fading Away : Saving Your Electronic Memories.
Canada Science and Technology Museum
<http://www.sciencetech.technomuses.ca/francais/newsrel/fading03fr.cfm>

モントリオール科学館の外で、現役の砕氷船「アムンセン」が停泊・公開中

東京の船の科学館で、戦後西堀栄三郎博士達を南極に運んだ初代南極観測船「宗谷」が静かに余生をおくっているが、ところ変わって今度はモントリオールである。モントリオール科学館は、セントローレンス川に面した古い波止場公園「オールド・ポート・オブ・モントリオール」にあるが、そこで遺跡として保存されているアレクサンドラ埠頭に、現役の砕氷船「アムンセン」が接岸し、2005年12月6日から8日までのごく短い期間ながらも、一般に公開された。同船は昨年冬の北極の海域で何ヶ月もの間氷に閉ざされた経験を持ち、まだカナダの人々の記憶に新しいだけに、公開が盛況だったようだ。

Montreal Science Centre.
The Amundsen Icebreaker.
<http://www.amundsen.quebec-ocean.ulaval.ca/>
<http://www.vieuxportdemontreal.com/activites/details.asp?id=380>

サイエンス・ノース科学館で、レゴ展、開催中

小さい頃、外が吹雪いていた時や雨が降っていた時、あるいは近所のイヤなイジメっ子や怖ろしい野良犬がうろついていた時、家から一步も出ずに、親に買ってもらった膨大な数のレゴで、小さい妹達とよく遊んだものだ。今でも時折、レゴが入ったさび付いた箱を開けては、もはやとうてい実現しそうなマイホームのモデルをつくったりしている。

さて、ところ変わって、今度はカナダのサドバリー(オンタリオ州)である。ここは冬が長く厳しいところであり、

いわば一見干涸らびたように見えるところだが、子ども達は現地で学校の授業がない時はゲームセンターでシケ込むことなく、多くは現地の唯一の科学館であるサイエンス・ノース科学館で過ごすことが多いようだ。それもただ寒さから逃れ、無為に時間を過ごすのではなく、創造的(creative)にめいめい楽しんでいる。レゴはいわばそうした時間の過ごし方にうってつけの玩具であり、世界の多くの科学館でもレゴが遊べる場が用意されている。サイエンスノースでも、レゴが常時用意され、子ども達が自由に使って遊べるようになってきているが、同館の667m²の特別展ホールで2005年10月8日から来春までレゴを使った特別展「レゴ・アドベンチャー」が開催されている。会期中、レゴを使ったさまざまなイベントも用意されている。

Lego Adventure. Science North, Sudbury.

<http://sciencenorth.ca/whatsnew/lego/>

オンタリオ科学館に、実業界から新しい理事長を招聘

欧米の博物館では実業家が運営理事会の理事になって積極的に館の運営にかかわっているところはザラだ。もちろん日本でも数こそは少ないものの、そうしたところはある。都内の某美術館でも出版社のトップを、そして次に化粧品会社のトップを館長に迎えて、企業経営のいくばくかの経験を活かして、それなりに目に見えるカタチで納税者の期待に応えてくれている。

さて、ところ変わって、今度はカナダのトロントである。

オンタリオ州政府は、このほど理事長の任期を終えたナンシー・ロックハートの後任に、実業界からマーク・コホン氏を迎えた。同氏は、トロントに本社を置くイベントのチケット・システムの開発会社「AudienceView Software Corporation」のトップであり、インターネットを使ったメジャーリーグやNBA(ナショナルバスケットボールアソシエーション)のチケット販売システムを手がけた。2003年から同館の理事としても活躍し、この3年間に同館が民間から調達した資金の獲得(目標額の4000万ドルを大きく上回る4560万ドル)に大きく貢献した実績が買われ、同館の内外で今回の理事長就任に大きな期待が寄せられている。

Mark Cohon. Ontario Science Centre.

<http://www.ontariosciencecentre.ca/media/>

* (やすい・りょう)

E-post : ZAKvaran@aurora.ocn.ne.jp

1月2月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
岩手県立博物館	テーマ展「新収蔵資料展」	12月10日～1月15日
陸前高田市立博物館	秋の特別展「おもちゃ展」	11月1日～1月29日
秋田県立博物館	企画展「くらしといのり」	12月10日～4月9日
ふくしま森の科学体験センター	特別展「科学遊園」	12月14日～4月9日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「宇宙の果てには何がある？」	11月1日～1月31日
	スペースパーク企画展「KAGAYA展」	12月3日～1月15日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第35回企画展「地球をささえる不思議な世界～キノコとカビのミラクルパワー～」	10月15日～1月9日
	第4回市民コレクション展「釣った魚に魅せられて」	1月28日～2月26日
栃木県立博物館	テーマ展「土のひみつ」	7月16日～3月31日
さいたま市青少年宇宙科学館	「子どもと大人の科学大好き展」	12月10日～3月5日
狭山市立博物館	平成17年度三富巡回文化財展「写真展 三富の石仏」	1月14日～1月22日
所沢航空発祥記念館	新春特別展「みて、ふれて、ひらめくサイエンス展 ーサイエンス展示・実験ショー アイディアコンテスト受賞作品展示会ー」	1月2日～2月28日
埼玉県立自然史博物館	企画展「身近にいる新参者」	1月6日～3月31日
逓信総合博物館	松本零士コレクションでつづる「漫画誕生から黄金バットの時代」展	1月8日～2月5日
	2006年NHK大河ドラマ「功名が辻」展	2月10日～2月26日
国立科学博物館	特別展「パール展ーその輝きのすべてー」	10月8日～1月22日
機械産業記念館 (TEPIA)	「最先端技術展～日本の未来をひらく～」PART II	1月17日～3月23日
板橋区立教育科学館	巡回展「毛利宇宙飛行士の部屋」	12月3日～2月26日
	第7回ジュニア発明展	2月4日～3月5日
たばこと塩の博物館	企画展「梨本宮家と渋谷～ある皇族妃が見た明治・大正・昭和～」	11月19日～1月15日
	特別展「明治を煙にまいた赤天狗～岩谷松平と岩谷商会～」	1月28日～3月12日
多摩六都科学館	冬の特別企画展～植物のはかない美しさを緻密に描くボタニカルアート～「角田葉子のボタニカルアート展」	12月9日～1月15日
	化石展「化石が語る関東の1500万年間」	12月22日～3月
三菱みなとみらい技術館	企画展示「ミクロの宇宙をのぞいてみよう～ナノテクノロジー～」	11月1日～2月12日
馬の博物館	テーマ展「古代中国・馬と人間の歴史」	1月5日～1月29日
	写真展「日本の馬（日本在来馬）」	1月5日～1月29日
横浜こども科学館	企画展「魔法のつみ木 カプラ」	11月19日～1月15日
	企画展「まり丸のボール道場ー球体の科学と遊びー」	2月11日～4月4日
神奈川県立生命の星・地球博物館	丹沢写真・資料展「丹沢～むかし・今・あした～」	12月10日～2月12日
黒部市吉田科学館	企画展示「かんじき」いろいろ～雪国の暮らし・雪上を歩く知恵～	12月10日～1月29日
	巡回写真展「富士フィルムフォトコンテスト」	2月4日～3月10日
富山市科学文化センター	第14回「私の身近な自然」展	12月23日～1月22日
	写真展「自然から学ぶ」	1月28日～2月12日
立山カルデラ砂防博物館	環境写真展「自然の魅力」	1月15日～2月19日
佐久市子ども未来館	ミニ企画展「クイズと実験でチャレンジ・ザ・物理」	12月23日～1月9日
飯田市美術博物館	寄贈記念特別展「仲村進展ー大地と語り、牛に歌うー」	1月14日～2月19日
岐阜県博物館	資料紹介展「美濃ゆかりの赤羽刀」	1月4日～2月12日

開催館	展覧会名	開催期間
中津川市鉱物博物館	第19回私の展示室「鉱物は語る大地の記憶－中部地方の鉱物－」	12月11日～3月5日
静岡科学館 る・く・る	「地球環境展」	1月14日～2月12日
東海大学海洋科学博物館	企画展「干支の海の生きもの(戌)」	1月2日～1月15日
東海大学自然史博物館	特別展「川原の石と海岸の石」	1月2日～4月9日
豊橋市自然史博物館	収蔵資料紹介展「干支展 戌も歩けば・・・」	12月22日～1月29日
	収蔵資料紹介展「平成17年度新着資料紹介展」	2月4日～4月2日
滋賀県立琵琶湖博物館	ギャラリー展示「タガベエのため池探検」	12月23日～2月26日
神戸市立青少年科学館	特別展「鉄道模型と遊ぼう」	2月11日～2月12日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展示「はてな?の世界」	10月22日～1月22日
	企画展示「古生代の世界」	2月18日～6月11日
明石市立天文科学館	特別展「全国カレンダー展」	12月17日～1月29日
	特別展「flower and message」	2月4日～3月2日
島根県立宍道湖自然館ゴビウス	第10回特別展「宍道湖・中海の貝類～あんな貝、こんな貝、知ってる貝～」	12月17日～1月31日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「第13回しぜんしくらしき賞作品展」	12月11日～4月2日
広島市江波山気象館	新春企画展「視覚・錯覚ミステリー」	1月21日～3月19日
広島市交通科学館	特別展「はたらくのりもの大集合」	1月24日～3月26日
萩博物館	企画展「発掘された城下町～出土品が語る江戸時代の萩～」	10月29日～1月22日
あすたむらんど徳島 子ども科学館	巡回展「なんで?科学のクイズ展」	12月23日～2月14日
愛媛県立博物館	特別展「岩石・化石大集合!－石が語る愛媛と地球」	1月28日～2月19日
	テーマ展「カニのくらし」	12月1日～1月29日
	テーマ展「えひめ生きもの写真展」	2月3日～3月23日

【お知らせ】

[平成18年度「宇宙の日」作文絵画コンテスト協力施設の募集]

「宇宙の日(9月12日)」を記念して開催される全国小・中学生作文絵画コンテストの募集・審査・表彰にご協力いただける科学館・博物館を募集しています。詳細は下記問合せ先まで。

対象：科学系博物館(科学館を含む)

募集期間：平成17年12月7日(水)～平成18年1月13日(金)

問合せ先：(財)日本宇宙フォーラム

広報・調査事業部内「宇宙の日」事務局

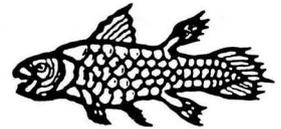
TEL：03-5200-1301(担当：田中/成田)

E-Mail：tanaka@jsforum.or.jp

美術

はく製

〈各種生物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース



有限会社 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 ☎047-337-5678
FAX 047-338-1978

本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564

E-mail:toyobken@taupe.plala.or.jp

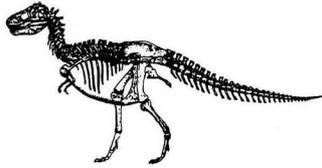
「人が集う空間」という意味を、ノムラはいつもトータルで考えています。

集まる理由を、ノムラは知っています。

集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、設計、制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

NOMURA http://www.nomurakougei.co.jp
株式会社 乃村工藝社 本社：東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171(代)

※世界の化石・
 鉱物・恐竜・化石
 人類・動物骨格
 標本及び模型の
 輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
 コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
 TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム
メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
 投映を可能にした小型・高精細のデジタル
 プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
 CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
 さまざまなシーンで活躍します。

▶各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒163-0512 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル12階 TEL (03) 3349-5301
 大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL (06) 6110-0570
 東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL (0533) 89-3570
 URL: <http://konicaminolta.jp/planetarium/>

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

株式会社 **ココロ**

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
 TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>



INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT

ONY KOBO CO., LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3 シグマ神保町4階
 TEL (03) 3221-1102代 FAX (03) 3221-1185



動物園／水族館／博物館
 企画・設計・施工

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
 監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…

株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
 札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
 URL <http://www.tanseisha.co.jp>

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本(化石・鉱物・岩石)
 古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
 TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745

<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail: info@tokyo-science.co.jp

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

川口市立科学館サイエンスワールド 学芸係 久保田耕平

千葉県立中央博物館 教育普及課長 森田利仁

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

国立科学博物館 広報・サービス部 広報課専門職員 原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 守井典子

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成18年1月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社